(遞信省認可)

いらつめ

掲載要目 一

靜子女史の韻文 **阿古屋姫**

櫻式部女史の文章 **月前叢話**

第八十四號
一冊定價金五錢
(別製八錢)

明治二十四年六月二十二日發兌

小說二種

懸賞文藝 二種

美妙子の韻文作法指針

いらつめ第八十四號目次（明治廿四年六月廿二日）

無名小説（七）……………………靜田一女生
愛らしい物四つ（懸賞文藝）
花の色（懸賞文藝）
阿古屋姫（韻文）……………………平山靜子
月前夜話（一）……………………さくら式部
詠松島（韻文）……………………鶉舎閑史
韻文作法指針（一）……………………美妙
愛の枝ばさみ（三）……………………東天紅
四時のあはれ（韻文）……………………野邊の若草
時鳥のとげ（韻文）……………………東天紅
述懐（韻文）……………………露蘋子
外に通信問答いろいろ

いらつめ定價

並製

一部金五錢、府外郵税別に五厘
六部金二拾七錢、府外郵税別に三錢
拾二部金五拾四錢、府外郵税別に六錢
二拾四部金一圓、府外郵税別に拾二錢

別製

一部金八錢、府外郵税別に五厘
六部金四拾七錢、府外郵税別に三錢
二拾四部金一圓八拾八錢、府外郵税別に拾二錢
（別製は最上の洋紙に印刷し且毎号内外の景色、風俗、花卉、美術、動物、英傑、學者、美人等の寫眞を必らず少くも一葉以上添へ、讀者の娯樂に供します。）

●毎月二十日發回發兌●府内無郵税●金子御差し送りの手續きは小爲替ならば拂渡郵便局とある處に（神田郵便局）と記し受取人氏名を（神田平永町九番地成美社）と御記入の事●郵券代用は五厘切手で一割増の事●見本は五厘切手で並製五錢五厘別製八錢五厘領収の上差し上げます●廣告料一行八錢割引無し

從第七十八號至第八十二號五部版權所有
明治廿四年六月十九日印刷　明治廿四年六月廿二日出版
發行人　東京市神田區平永町九番地居住　山田武太郎
印刷人　東京市本郷區駒込西片町十番地居住　山本忠之進
發行所　東京市神田區平永町九番地　成美社

○懸賞文藝新題

○第四十八回題（何でもよし）
右　沈思……………………七月廿日〆切

○第四十九回題（何でもよし）
右　夏の闇夜……………………七月十日〆切

いらつめ第八十四号（明治廿四年六月廿日）

無名小説　神田一女生

第六回の續

父ハ一方ならぬ驚き、静子ハ顔をぢッと見つめて、

父「な丶丶なに秀吉が居ない？　逐電したそりや眞當か？」

静「何でお父さんお虚言を申上るもんですか。　是を御覽遊ばして……この書置を……」

さし出す手紙父ハひッたくる様に取ッて、口の内にて讀み下し、

父「是ぢや何のためにかけ出したのか、さッぱり譯が己からないぢやないか。」

何のため？　御存知ハあるまいけれど、母上の淺ましいなされ方がとおもひながら、

静「ちッとも譯がわかりません。　そんな様子ハちッとも見えませんでしたから……」

父「何しろあまりや困ッたが、知己の處問ひ合せるといッた處で……まさかさう直に見つかる處に居りもしまいし。」

静「さうでムいます。　それよ馬鹿でもありませんし、まさか人の笑ひ艸よなるやうなこともありますまいから、この儘にして別よ荒立てず、内々で御聞き合せなる方がよろしうムいましやう……余程何か思ひ込んだのでムいましやう。」

この咄しを次の間で聞いて居た芳子、おもひかけぬ秀吉の逐電、このまゝ何時までも歸らねバ、此方の都合ハ萬々よけれど、逃げやうとハ意外のことゝずッとは入ッてきて、

母「秀吉が居ないッてかい？　まアどうしたのだらう。　鳥渡その書置御見せ。」

父「實よ意外とも珍事とも言ひやうがない……一体何が不平で逐電なんどしたのかさッぱり考へがつかん。」

母「どうも仕方がムいません、無い昔しとあきらめる外に……何か私等の仕打に氣に入らない事でもあッたのだらうかねエ？」

氣がとがめてか妙よいふ母の言葉、

静「そんな事ぢやムいますまい。　氣に入らないことがあッたにしろ両親の事ですもの……それやさうと何か紛失物でもムいませんか。」

紛失物と聞く静子の心、どうぞ路用でも澤山持ッて出てくれて居ればよいがと、父の用箪笥しらべるうちも心よ願ふ弟思ひ、

○「いや何も紛失してハ居ないやうだ。」

この一言静子はいかに失望せしことあらんか。

第七回

「お竹どん々々大事がおッ始まッたぜ。」

どん〱戸を叩くとげしさ。

竹「何だねエ。　もうさッき起きて、お釜の下燃してゐるの

ざよ……聞えないのかねヱ、そんなに叩いて、お上で御目が醒えるといけないぢやあいら。」

吉「そんたらはア早く此處あけれはえゝだ。」

竹「ほらそんなに無暗に引ッぱッたッて、掛がねがかゝッて居るもの明く物かね、お待よ。」

とッぱくさ起てガらッと戸をあけ、

竹「何だえ、大變々々ッてさ？」

吉「大事だから大事だッていふれだ。　人間がころげ込んだぞ、まアきてたもれ。」

息切ッていふ男の顔、お竹を呼べる〻女はふッと吹き出し、

竹「何たねヱ、あんなきよろんとした顔して、まじめで吉藏どんが相かてらそくだら無いこと言ッてるよ朝ッぱらから……私しや知らなんよ……わら人の手を引ッ張ッてさ。　そこへつれて行くのだ……わらおよしよ。」

むりやり引張ッて行く吉藏、門端まで來て、

吉「そ……それ、虛言ぢやあるめヱ。」

竹「ほらまア本當だッたよ……そうしたんだヱ？」

吉「そうしたッてかうしたッて余今朝門をあけたば、轉り込んだゝ。　たまげたねヱ、門によッかゝッて居たものだんべヱ。　巡査呼んでくうか？」

竹「まア御待よ可愛さうよ、まだ若い人だね……くるしさうだよ。　何しろかうして置いちやいけないんから、手と御貸しよ。　さうして御前の部屋よ寐かして置かうぢやないか……ぶつ〳〵言ッてさ、年寄りのやうでもあいねヱ……さア手を御貸しよ……旦那樣よ申上るよ。」

この一言余程あたへたものと見え、てぶつ〳〵云ひながら吉藏と兩手伸ばして、お竹と共に仆れ込んだ書生をわが部屋に擔ぎ込んだ、

竹「さうしておまへの布團を敷いてお遣りよ……さう〳〵御慈悲深い旦那樣だからかうして置きましたと申上ると乾度お前も私もお賞に預るよ……お前寶丹持ッてるかへ？　持てゐる感心だねヱ。　水もそこに丁度あるから早く飲ましてお遣りよ。　お目覺めになると直に申上るから……よウく氣を付けておやりよ。」

臺所の方で女の呼ぶ聲、お竹どん々々。

竹「あゝ呼んで居るから私や行くよ。　能く世話しておやりよ……あいよおゝいそがしい。」

下駄踏みならして、四邊八間地響きさせて駈け出すお竹

吉「ほんな女ッて見たことねヱぞ……少し御氣に入ッてるのを鼻にかけやアがッて、やれ吉藏どんあゝしろのかうしろのッて、五月蠅奴た」。

常「お竹どん何處へ行ッてるのだねヱ。　お釜の吹き出して居たから火を引いて置いたよ。　朝から氣樂ぢやないか。　又吉藏爺の處でのろけてゐたのだらう。」

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

竹「そんな事よしてもおくれ。まアさう怒ッたものでもないよ。是でもよッぽどおなさけ深いのざアね。それ〳〵かう〳〵で今朝かして來たばかり。」

常「さう書生さんかい？ 可愛さうに、どうしたのだらうねエ。」

竹「急病でも起ッたのだらうさ。よッぽど憔悴れてゐるると何處か左團次に似てゐるよ。お前やおかつさんが見たら大變！」

常「おやいやだ。馬鹿言ッてるよ。」

「今日は早く起きるけど、飛んだおとで大不手廻しさ。もう何時？ 六時半？ そらお目覺めになッて召して入らッしやるぢや無いか。まだ汁の味噌が磨れて居ないんざよ。もう無宙になッて耳が遠くなッてさ、始末にいけないぢや無いか。」

味噌を磨る音おろ〳〵〳〵。

朝の食事も終り、主人はこれから出勤と衣服を着換へながら、

主「常、先刻の書生といふのは吉藏は部屋に寐てゐるのか？」

常「はい大分よろしいやうで、今がのたくらすや〳〵寐たといふことでムいました。」

主「さうか。出勤がけに鳥渡寄ッて見やう。」

やがて支度も出來て、玄關に立ち出で、書生が直して置いた靴を忙しさうに穿き、

主「吉藏の部屋に寄ッて行くから貴樣は跡から引いて來い。」

と車夫を後に從へ、

主「吉藏……」

吉「へい是は旦那樣飛んだ處へ……」

主「なアにかまうな置いとけ〳〵、さうして書生はどんな樣子の？」

吉「先刻から眠て居りますざ……爰でがんす。」

と吉藏が指す衝立の影を鳥渡のぞいて見ると、色は黒く、頰こけて、いかにも憔悴れた面さしながら、何處やら見覺えのある月山の倅秀吉、主人ははッと驚いて、出勤がけの足、玄關に小もどりして、不審さうに見てゐる中働きのおかつといふと側に呼んで、

主「あの書生は少し心當りがあるから、氣分がよくなッたら奧の六疊につれておけ、もし容躰が惡いやうなら村田（醫者の名）を呼んで、見せるがいゝ。さうして聞いても私の名はいふな。いゝか、一同にさう言ッておけ。」

といひすて、車に乘り、縣廳の方へがら〳〵。

常「鳥渡お竹どん今朝の書生ね、あれは旦那樣のお心當りの人だとさ……それでなぜだかもし聞いても旦那樣のお名はいッちやいけないッて……お前お饒舌るから氣をつけておいでよ。」

竹「おやさうかい。そりやいゝことをした。道理で昨夜は夢見がよかッたよ。」

常「なぜかい？ 私やわけがわからあんわ。」

竹「まだ若いねヱ。だッておまへ旦那樣の知人を助けたのだもの、たんと御褒美があるだらうさ……あの時私がゐなきや吉藏どんとすぐに巡査に渡してしまはね。」

常「ほゝ〳〵戴くことばかり考へてゐるね。」

その日は午後四時頃奥の一間で主人と彼書生と咄しは趣、

主「おや失張り君は秀吉君ですか。實に奇遇で……實は君が逐電されたことは昨日御尊父からの書面で承知致してうのげながら憂慮してゐた處であッたが、まア何しろこんな喜ばしいことは無い……氣分はいゝと言ッても無理してはいかん……遠慮なく横になッてゐらるがいゝ。」

と一人喜ぶ主人の老人、秀吉は合点行かず、熟々と顔を見つめ、彼の人か、此の人かと、心の帳面操り返へせど、たれも思ひ當る人もなく、只聲に心覺えのあるやうなれど、是とて急にはおもひ出さず、詮方なければやう〳〵口を開き、

秀「私の名と御承知であれば、定めて知己の方で有りましやうが……甚赤面の至りながらお見忘れ申して……」

と半ばいはせず、老人はにッこり笑ひ、

主「是は近頃疎忽千萬であッた。私の名もなのらんで、あはゝいやもう年を取ると意久地がなくなッては……見忘れらるゝも尤もぢや。私は東京で御隣家に居た野澤等ぢや。」

といはれて、はッと心付いて、あるほど宮城の知事四五年前まで邪魔なほど行ッた家の主人、見忘れるとて我ながらおそましきことのかぎりとおもへど、さういはるればなるほどと思ひはするものゝ、東京にゐる頃は無かッた髯今は鼻下に貯へ、額の波も數を增し、頭も半雪となッてる容貌、見ちがへるも尤もと、我と我心辨解して見ても、何となく面目無く、

秀「實は面目次第も無いことであまり御老年のやうに見うけたので、大人とも存せど、失禮の段は幾重にも御容赦を……殊に今曉來一方ならぬ御厚情に預り、危い命を取りとめ、感謝に堪へんわけで……然しかゝる体で拜顏しても如何にも赤面の至り……」

といひかける腰を折ッて

主「何の〳〵そんな心配は入らんことで、若いうちは隨分無分別なことも間々あるぢや。私もこの二三年々不相應にひどく老衰してな……この劇職には堪へん位ぢや。それに入らんことゝておもひながら、皆が勸めるので髯を貯へあおせしたから、四五年前から見たら餘程變ッて居るぢやらう。あはゝ見ちがへるも尤もぢや……遠慮なく横になッて居らるゝがいゝ。どうとも自由にしてな。さう遠慮しては咄しが

出來ん……生憎この二三日前から家内と娘は鹽竈に出かけて、留守ぢやがすぐに郵便を出して置かう。あの頃たしか九歳であった春枝な、あれが今はもう……十四になって此方に居るぢや。　折々君の噂をして居るがさぞ喜ぶぢやらう……家内はそれ丈け、あとは召使の男女ばかり、少しも心配せず、わが家同様婢僕に命ずるがよろし。　何だか私は子が一人殖えたやうな心持がして誠にうれしい……まアゆっくり養生せらるゝがいゝ……あゝ私も自分ばかりいふことばかりいってゐるが、一体君が逐電せるまでになった原因は何かな？」

原因をどうしても一度は質問を受けるであらう、何と答へやう、まさかまる切り偽りをかまへるも實をいへば親の罪、どうしたらと先の程より思案にくれてゐると、意外に他の咄しを立てつゞけてひまのない老人、けゞんな顔して聞いてゐる秀吉……終になってつと出された質問……試驗の難問よりなほ苦しく、さてこそと又今更のやうに考へなほして見てもいゝ工夫は出ず、深切さうな野澤君、寧そ何もかも打わけてと有の儘にはなし出したと見え、老人の驚き、折ふし受け答へのはげしさ。

主「うゝそれでは御母公が……實に驚き入ったことで……さうしてそれは危險のこと、君子は危きに近よらずや……さういふおそろしい人とも見えんがな、君が實子でないといふ事は承知してをッたぢや……なる程尤な考へぢや……逐電せらるゝも無理はないな。　然し病氣の全快せんうちにはかんぢやッたが……それで……婆がさぞ當惑さるであらう。」

秀吉はほッと息ついて

秀「そんなわけでありますけれど、甚心苦しいあとながら、私はどうしても獨立の道がつかんうちは、たとひ餓死する場合に及んでも便りはせん積まで……」

主「そりやいかん、そりや片意地といふものぢや……今君は少しも金が無いといはれたぢやらう。それでどうして修業する積りでゐらるゝか……それより東京へ便りして、何との咄し合をつけて、心安く勉強するが私は良策ぢやらうとおもふが。」

秀「段々御深切は程はありがたく思ひますが、何分只今となって東京にかへることは……實は私も便りにして參った乳母が死去の後と聞いて如何とも……途方に暮れた次第ではありますが……人の家僕になって身を粉に碎いても何とか身の方向はつける積り……この度圖らず拜顔致したあとは何とぞ東京の父母へは勿論、誰にもお洩しなく、無言に歸し置かれるやう願ひ度いもので……」

野澤は困ッたといふ顔つきにて、

主「それは困ッたね、どうも知りつゝ報知せんでは……東京でもさぞ心配してゐらるゝであらうな。」

秀「萬一あなたが東京に御報知下されて、迎ひでもまゐるや

うなことがあると私は死を決してゐますから……」

主「それはいらん小胆のことぢや……がそれほどおもひ込んでゐらるゝならよろしい、後日月山君から恨みを受けるではあらうが一切他言は致すまい。」

秀「早速の御承諾で有り難き仕合せ、私も安心してゐらる、これなら大丈夫と思はれますゆゑ、早速ながらお暇まうし、この御恩は他日報酬する時も御座りましやう。　随分御壮健で……」

と一禮して立ちかける秀吉、野澤は周章てゝ引き留め、

主「これも又どうしたものぢや。まだ他言すると危ぶんでゐらるゝか……昔なら金釘とでもいふ處なれど、さういふ譯にも行かず、只約束を證文より堅いものぢや……私も君の依賴を承諾して見れば、何かとまゝ後來のこと相談せにやならんぢや。　まア〳〵ゆッくり氣を落ち付けて、養生せらるゝがいゝ。　決して私が君の不得策になるやうなこと爲もせんから……安心して々々々々。」

と引き留める野澤、秀吉も默止し難く、遂にいふに任せて、此處に留りぬ。　秀吉が斯かる始末にありしは、先きに下宿屋にて屈托のあまり、何處を目的とも無く、夜更に立出て、彼地此地を徘徊なすうち俄に腹痛はげしく、胃病再發の摸樣にて堪へ難ければ、それとも知らず野澤の門によりかゝり、遂に翌朝に至り、かゝる始末に及びしなりとぞ。

第八回

靜「おや又時雨かとおもッたら木の葉の落る音だッたと見える。」

と口の内に言ひながら少し伸び上ッて、硝子越しに庭の方を眺め、

靜「まア大變落ち葉が積ッたこと……あんなよく染めた紅葉を惜しいやうだ……大概樹が坊主になッてさ……何だか冬になると世間が淋しくなるやうな心持ちがする。」

と坐ッて机にもたれ、讀みさしてゐた本を閉ぢ、

靜「この住吉物語の大納言か中納言の家に行ッた處……幼子が姫に似てゐるッて……眞實に可愛さうだッた、繼母が憎らしいことさ」。

机に臂をついて、兩手を頰にあて、本の上表紙を無心に見つめ、何か考へる樣子、

靜「繼母といへば……お母さんもどうせ私しは余處に行ッてしまふものと思ッてゐらッしやるから、よく深切にして下さるけれど……秀吉には……今頃はどうして居るかしな、噂すると御母さんの御機嫌が惡いから、あの後つひぞ口に出した事もないが……」

鳥渡指を折ッて

「もう居なくなッてから三月余りになるが……おもひきりが惡いけれどあれ私丈けでも一首いッてゐなかッたのだらう。」

第四十一回懸賞文藝應募得點

題　愛らしいもの四つ

●文章

（イ）　成田國子（トウケイ）

「玉やおいでよ！　早く！」

うつくしき聲にて叫びしは七つか八つと思はるゝ女の子、目元ぱッちりと涼しく、鼻筋口などもなみ〳〵、顔は丸顔で肉もたかよ、色も雪を欺くと申しましやうか飽くまで白く、頰は御祝ひの白酒の爲めですか、天然の美質でしやう、桃色を帶び、その美しい額ふも前髮ふさやふお下り、髮は唐人髷とかいふ附髷をつけて、赤い薔薇の花挿頭をさして、今日も三月三日、お雛祭なれも、曠衣着飾ッて居りましる。むッくりと太ッた指先のとけてゐる愛らしい手でお雛樣に着物を着せたり、帶をゞめさせたりしてゐましたが、

「玉や、おいでといふに！　能いもの上げるからさア！早く、玉や！」

玉といふのは此子に可愛がられる三毛猫の名です。猫も聞き馴れてゐる聲で呼ばれ、尾を振り、首れ鈴鳴らしながら、駈けて來て、例のことゝ見え、膝の上にも乜りましたうふ、お雛樣をいぢッてゐた手を止めて、毛並れきれいな猫れ脊を摩りながら、

「さア此れを上げやう。　お前は本當に可愛いゝわ。　能い子だね。　先ッきあの御隣りの黒斑が家へ入ッて來て……あの猫は惡らしいよ。　先は親を食ひ殺して仕舞ッて、又此な可愛らしいカナリ鳥の子を取らうとして……さうしたらお前は駈けてッて黒斑を追ッたね」本當よ悧巧だよ。　さア是を上げやう。　復あの盗賊猫が來たら追ッかけておやりよ。」

やがて元のお雛樣に着物を着せて仕舞ッて、同しく膝れ上に乘せ、「玉も可愛いゝがお前も可愛いわ。　皆ながお前は私に似てるつてさういふからお前は私の妹だね。　さア二人で抱おしよ。　一緒に寐やうねエ。」

子守歌、猫はごろ〳〵と、カナリ鳥も子守歌に和して歌ふ、人形は何にも知らず、げに罪無氣あり。

（ロ）　撫箏女史（ミン）

「お母ちやんこれお負さしてよ。」

「おや玉！　どこにゐたの？」

「お藏の前に寐てゐましたよ。　坊は何より……お母ちやんよりも玉が好きだ。　いゝ子だ〳〵。　お母ちやんお負さしてよ。　早く！」

「本當お玉といゝ猫だねエ。　もッと頸筋をくすぐッてれやり。　又寐たと、よく寐るから寐子といふのだよ。　母ちやんも猫を眞似てはいけないよ。　朝いつまでも寐てゐてはこの間から上ッた幼稚園へ行くのが遲くなるから。」

「ねゝ玉はいゝ子だ〳〵。　玉が死ぬなら坊も死ぬ。　明

すから幼稚園へ玉と連立ッて行くから定(守女の名)は來なくッてもいゝ。　向ふの梢ちやんも誘はないよ、明日から屹度。

ねェ玉!」

「お前の一番可愛いゝものは何、玉?　もう一つ考へてごらん。　昨日叔母ちやんから戴いた人形!　もうないの?　まだあると……東京の叔父ちやん、これで三つ。　もう無いの?　お母ちやんはまだ一番可愛いゝものがあるよ。」

母の膝にもたれかゝッて、あどけなく、小さい猫を余念もなう弄んでゐるのは梅山薫、今年やう〳〵四才になる稚子でした。

あゝ悪くげの無いのは稚子—天眞爛熳—まこと稚子は愛らしいものゝ極です。　まして其母親—愛の塊ともいふべき母親の目には何んなに愛らしう見えることでしやう。

子猫!　人形!　叔父!　なは一層愛らしいもの、今母の目前に唯一つ!

(ハ)　松乃(イハシロ)

よくも咲きたり牡丹の花、中にも薄桃色のは他にない類のあき珍らしい花今日か明日かは開きさうな蕾の工合は實に愛らしい子供の顏に笑を含んぢやうです。　蝶も羽を引き止められてか花の傍より飛び往きもせず、何處よりかだしぬけに飛びかゝりし猫、叱られてにやァと眼を細め、許してと言ひたいやうな顏つき、さし招かれてこそ〳〵膝の上に上る樣は。頭を撫でゝやればうれしがりて人の顏とのぞく目もと、眞に

其の愛らしいこと。

「何してゐるの?　猫?　そんな猫なんぞよりは此の人形が餘ッ程愛らしいわ。」

「千代ちやんもそをお見せ。　おや〳〵可愛らしいこと。　髮は黑くッてそして結はないの?　顏がまるくッて頬のふく〳〵した工合は、はゝゝ千代ちやんのやうですねェ。」

「いやよそんなに人の顏を見て。」

「ぢッて千代ちやんの方が餘程いゝもの。」

(ニ)　十八居士(トヤマ)

私は世界の物過半はまで愛らしいものぢといふ觀念を抱いてゐますが、題が四つと制限してあることでそうら、私が近頃愛らしいと考へました事四つを述べましやう。　は私は一人の弟がありまして今年四才になりますが、一日母の側へ走ッて來まして、

「お母ちやん、抱いておくえ!　兄ちやん本讀む、私乳飲むのが仕事……」

又或日の事、弟が何かお母さんに叱られまして、わァ〳〵大きな聲で啼いて居ました。　私が蒸菓子二つ持ッて、

「これ坊!　は泣きでない、これを上げるよ、お食べな。」

紅葉の樣な手で受取ッて、口元へ持ッて行きながら、嫣然笑ひました。　愛らしさ、何とも言はれませんでした。

其翌日私が他所から歸ッて來まして、帽子と頸巻とを部屋

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

に置いて、一寸來客に應對してゐる間に、弟は其帽子―頭の二つも入りさうな―を鼻の邊まで被り、頸を肩に當てまして、私の側へよぼ〳〵歩いて來て、

「兄ちやん！　私は兄ちやんだよ。本敎へて上げやう。」

其日の來客に御馳走しやうと思ふて、買ゐて置きました魚を何うしたものでそか畜犬が取りまして、口に咬へて走りました。　下男が大に腹を立て、、棒を打ちつけましたら、犬の後足に當りましたから。　犬はわん〳〵泣いて逃げてしまひましたが、犬のわん〳〵に調子を合はして、わッと泣き出したのは弟です。

「三平（下男の名）！　はのん〳〵、ほんの大事の犬を打ッた！可愛ちやうだ。」

（ホ）

芳苑女史（トウケイ）

昨日まで降積いた空合も今日は早や晴渡りく、暖さも前より一倍に覺えました。　庭面を見渡せば池の邊の櫻まで暖かさに浮されてか、未だ一二輪と思ッた花も余程紅ゐを帶び、薄き朝霞が棚引いた樣で、得も言はれぬ風情、その樹の下に丸く肥えたる小女余念も無く、草花を摘んでゐます。　その無邪氣なのが可愛い極です。

小女「乳母やあれ御覽よ。　彼處に又鳩が來てゐるよ。」

乳母「何處に？　あゝ、餌を拾ふてをりますよ。　ほんとに鳩は可愛いゝこと。」

小女「あゝ鳩をタク（いぬの名）が來て、取らうと思ッて御忍びして行くよ。　タクや〳〵此處へおいで。　お前はねあんな可愛らしい鳩を取るんぢやないよ。　あらいやだねエ、乳母やタクが私の顏と舐たよ。」

乳母「おほゝ孃ちやまが可愛がッてくださるからそれで御禮をしてゐるのですよ。　孃樣もう御姉樣がいらッしやる時分ですから乳母は御座敷へいッて見て參りますから此處に待ッてゐらッしやいよ。」

小女「乳母や私が見て來るよ。　乳母はタクと此處で待ッてたいでよ。」

やがて小女は一散に馳來りつ

小女「乳母や私しは嬉しくッて〳〵。」

乳母「おほゝ何でそねエ息と切ッてさ。　何がそんなに御嬉しいのえ？　孃ちやま！」

小女「あのね、御姉樣がゐらしッてよ。　そして私しの一番好きな可愛らしいもの戴いたよ。」

乳母「何を戴いてゐらしッたの。」

小女「何だか當て〻御覽よ。」

乳母「何んでしやうね。　孃ちやまの御好きで可愛らしいものと鳩。」

小女「いゝえ。」

乳母「そんなら犬當りましたらうかゝ。」

小女「うゝん當らないよ。ほらこの人形の愛らしいねエ。」
乳母「ほんとよ可愛らしいこと。はゝタクンが戯くものだと思ッて、ちん〳〵をしてをりますよ。」
小女「乳母やタクも可愛らしいねエ。」
以上五章第四等賞

（ヘ）　明日香（イヘシロ）

世に花ばかり美しく愛らしきものはあらじ。糸とも見えて霞を纏ふ春雨に、やゝ綻ゝめる海棠のものはおぢしてそむけるもをかし。又幼兒ばかり美しく愛らしきものはあらじ。愛温かき母に抱かれつゝ、涼しく澄める月を見て、にこやかに手掌打鳴らし、「お月樣幾つ」と舌足らずに歌ふさま又なく可憐なり。時めく花の群に入らで、靜に秋を送る白菊れ露をかざせる、心さまのすぐなる杉にも似て、起居ふるまひのとり飾りなき田舍娘よそひて、野邊の蓮華草、又中々に愛らしからぬかも。
右第三等賞

（ト）　美念（トヲケイ）

髭むしやくしやの且那樣、肥太ッた体もッたりと正坐に据ゑられて、烟草すッぱ〳〵長煙管ぱく〳〵はたき出す吸殻を傍にゐる細君が右の手で火箸を持ッて、丁寧に灰の中に埋めながら、左に小供を抱きたり。廻らぬ舌で發束なき言廻し、緩ひ癖小走に危な相な歩きなど、今年四つの愛らし盛り、小供は母の懷に顔差し入れて、乳房を押へてちやッと吸ひ、舌打して母と父とを顔見較べて、うまん!! うまい!!
「お母ちやん今夜はねエ……」
「坊は姉ちやんと何處に往ッたのかい? 神田? さうかい、面白かッたの……姉ちやんに兵隊さんを……しやアべると買ッて貰ッたの、お母さんに御見せ、まア奇麗だこと。」
「それからねエ、あのゥちんぷん〳〵姉ちやんねエ……」
「ちんぷんッて解らない。お雪どうしるのかい?」
今迄默ッてゐた十四五の少女はおとなしく、
「新聞賣れ事て御座いしまやう」
「新聞賣が何うしたッて?」
至粹的紺飛白、三千丈的白金巾、鐵可斷の壯士、三更踏月の風流男、君僕の聲は車馬の響きと雜ッて、耳喧しき雜踏否繁華を極めたる小川町通り。子供の子を牽ひてぶら〳〵と來掛ッたのと二七餘りの少女、其れと行違ひに聲高々と、
「御覽じませ、是は今晩發行の讀賣新聞號外、唯今出た號外……」
賣ッて來たのと年頃二十年前後の若者あり。元より身には綴縷を着てゐる、が何となく顔目いやしからぬ書生體。娘は聲に驚いて思はず顔見て、
「おや今の新聞賣りは兄さんのお友達に違ひないがーあの

兄さんの上級の人だッて。何時も內へ來て兄さんに何かと敎へてお出なさる春田さんに違ひないが。　まア御可愛相に新聞賣ッて晝ハ學校に、ほんたうに可愛相…可愛相だわ……彼のさう〳〵此處に何時の麹町の叔父さんに戴いた御足があるから一今夜あの何を買ふ積りだッたれど、春田さんにこれ上げやう……御併しどうして上げたら好からうか知らん……」と考へて居たが、さう仕樣と獨語して、新聞賣の跡追掛けたり。　きよろ〳〵と蚤取眼で來掛る汚い男、今玩弄屋の前に立ッて小供の望みを聞いてゐる少女の姿を見付くるや、貴娘〳〵と呼立てたれバ此方向きし少女に一禮して、

「つひお見失ひ申しまして……申譯がありません。　先きのお剩を差上ます。」

少女ハ此處ぞと、

「何でそか私しハそんな事知りません。」

「え〳〵御存じなハ？」

といひながら又顏を覗いて、

「いゝえ貴娘に相違ありません。　お召ハ黄色なのに坊ちやんのが紫……貴娘です々々。」

いゝえ屹度と爭ふ內、娘ハ帶の間に挾みし號外を男に見つけられ、兎角する間に往來の人も何事ぞと立止まるにぞ、今ハ詮方なく、紙幣を取ッて其儘赤くなッた顏は群集の中に見えずなりぬ。

　　　○　　○　　○　　○　　○　　○

「まア感心ね……お雪ちやんがお金を遣ッたのとハひ、其に又新聞賣ハ爲ても道ならぬものを取らぬといふ春田さんとかれ心、本當に二人共可愛らしい心立ではありませんか、ねエ吾夫？」

「うん左樣だ。　お雪坊今度その春田とかゞ來たら此處へ呼んでお出で、

といと返事も口の內、余り褒められて今ハ下向いた計り。

一座の話しに小供ハ厭きたのか、先ッきから彼方こちらと馳廻ッて居たりしが、今ハ父の膝の上に上ッて、小さな愛らしい手で胸髯をいぢりまわし、長いのを捕へてぢイッと引ッ張り、皺むる父の顏覗き込んで、

「ぱア!!」

右第二等賞

第四十三回懸賞文藝應募得點

題　花の色

●俳句

朝戶出や又格別の花ハ色…………竹內はな子（カミツケ）上

暮をしむ花や一きハ色のよき…………仝上

ちりの世にそまらぬ色や夕さくら…………仝上

右三句にて第三等賞

●唱歌

(イ)

鳥部の山　烟は止ます。　あだし野の　露消え殘る。
そをなとて　花の色のみ　いつまでか　變らでやある。

立花てる(トウケイ)

(ロ)

あゝうるはしき櫻花　清き流れに影うつし、
已が姿にやてるらん。　あゝ美しゝ花のいろ、
とばかりながむその折も　ふッと吹きくる春風よ
あはれ櫻は水の中　たちまちかはる花の色。

小田よし(エチゴ)

以上二曲第四等賞

(ハ)

露萃子(センダイ)

愛きは　花の色かな　紅ゐの　蕾ひらへば
天地も　和らぐといふ　櫻花　園に開きて
宵々の　月影おぼろ　梅の花　野に綻びて、
鶯の　鳴く聲清し。　情なき　洩れ水すら
花浮けば　色添へよかり。　人心　浮かぬものかと
よしの山　奥の深雪に　義經の　鎧は濡れき。
大宮の　琴のしらべに　義經の　心は浮れゝ。
いかばかり　美しかりし、　胸や光る　西施の頰や。
ほゝゑみて　城を傾むけ、　ことばして　國をほろぼす。
たをやめの　凹む靨よ　この力　籠りけるかな。
さりながら　思へてあはれ、　いにしへの　小町の歎き、
「徒らに　眺めせし間に　花の色　移ろひにけり。」
定めなき　盛りすたりは　おしなべて　世の中の常。
宵の間の　雨一としぐれ　花の色　消えて跡なし。
ゑめ形ち　光るといへ　春の夜の　夢の間ばかり
賴なき　花の色かな

右第三等賞

●文章

(イ)　東野太郎(トウケイ)

今日の樣ないゝ天氣とあたら内にひきこもり居るも無益と筇を取ッて出たは出たものゝ、さして行くべき所もなし、ままよ田舍の景色も一層ならん、いで近きあたりの練兵場に遊ばんと一直線に小道を傳ひ、ぽッと息ついた所と吾が目指せし所、嬉しやまだ櫻も散らず、吾を待てり。あはれ此櫻色めでたげに咲き香へとも、見る人とても兵士の外にあらじ。誰がためよ粧ひするぞ。兼好法師は草葉の影より心なき業ありと叱りもせん、枝手折りて持ち歸り、吾室に活け置かん、來る人毎に譽められて、世に出でし心地するなるべしと、土手に上り、枝に手をかけ、人や來ると振りかへり見れば、近眼の事とて、能くは見えねど、一町許り隔ちし森の中に手籠をさげて立ちたるは、確かに婦人白き手拭もて頭をつゝみし樣なと如何にも優にやさしげなり。はて床しき人の心かな天女は寫眞は得てのゝるひなびたる郷にあるもの、死せる花

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

よりも活ける花の色を見るに如かじと、枝にかけし手を離てバ、櫻はびんとはねて、夕しゃん顏。見失なッてはならぬと一目散よ駈け行いて見れバ、婦人ハ婦人、四十路と越えし婦人。　活ける鼻の色ハ紅。

（ロ）　　　　春　枝（トウ/ケイ）

上野大佛の邊にて車を降り、あちこち見まもしつゝ博物館の方にゆるきながら、「まア大變な人だ事」「さやうさ」「あら御覽よあんなに花が奇麗だもの」「ほんたうよ御孃さま、あんな奇麗なのを見んものもつまりませんねヱ」「だッて御覽よ、みんながあの花は見てゐないぢやアないか。　姉さんはッかり見てゐるぢやないか」、姉少し顏赤らめ、「嘘言おつきよ、ねヱ末?」「だッて」といひつゝ後振り向き、「姉さんの顏も一寸櫻色だねヱ?」

（ハ）　　辻井縈子（トウ/ケイ）

「おやこんなに成ッちまッてさ、知らない中よ……」

机の前なる丸窓の障子おしあけ、庭の櫻の凋みかゝッたのと見て、小町孃の獨言、

「もこんなにしなびちやアだめだよ。　宜い香いもなにも有りやしないもの。　人間もさうかしら?　顏よ皺が寄ッて、髮の毛がなくなッて、齒がぬけて、腰が屈んで……おゝ嫌なこッた。　何時そんなになるだらう。　あゝ慄として來る。」

（全）

七「酒なくて何のおのれがさくら花だ……一杯飲々」

づゞ六、づゞ七二人連の花見と見えます。

六「小野の小町、花の色はうつりにけりな白妙の……どッこい、いたづらに我身世にふるながめせし間に、てゝんだ、はゝゝ」

七「ゲフー、エイー鼻の毛ハだア、生ひ延びたりな異な面で、お檻におぼれて、現言ふ間にと一杯ぐ。　ちよッ難有い。　おい娘さん々々鳥渡來た。」

六「こゝ君がつまらぬ事いふから姉さんが顏赤くした。君の鼻の色と、花の色と、はゝゝ是で花で色の三幅對が出來た々々々。」

（ニ）　　須磨士顏（トウ/ケイ）

「兄さん一寸來て御覽なさいよ。　お池の向ふ岸のが赤奇麗に咲いたことよ……あらあれお山の方にはあんなに散ッてよ。」

「左樣さ實に脆いもんだね……だが光ちやん、此處の御庭中での花が一番お好き?」

「さうね、妾ハこの八重櫻が一番好きなのよ。　だからね兄さんあんなに奇麗に咲いてる間に御寺參りに連れて行ッて頂戴な。　そして妾の一番好きなお花をお母さんのお墓よ供るの……ね兄さん……お母さんに供げたいわ。」

＊　＊　＊　＊　＊　＊

指屈ふれバ、最早六年の昔となりぬ―定めなき無常の嵐よ浮世の春も知らで、果敢なき露と消え行きしも。臨終の床に悲しげに己れの手を握りしめて、堰きあへぬ涕を名殘よせし彼の心ハ如何なりしか。 其俤ハ……今は一基の苔蒸す石……母の傍に！ 思はざりし、彼常よ妾の最も好きな花よと愛でしその……その花……ハ……色ハ今なほ變らで、いと露けき手向の花とならんとハ！ 嗚呼春色ハ誰が邊にある ？

以上四章第四等賞

（ホ） 立花 てる

「はゝ？ 君出來たか？ んさうだらうよ。 僕ですらも今沈思默考の域に沈んでるんだもの、 況やだ。」

「何？ 君ですら？ ふら？ 況や？ へん掏賊と茶碗屋の間以て呆れるせ。 待てよ！ 今出來るぞ、近松、セキスピヤも三舍を避くる程れ名文を。」

「や是ハ驚い。君にして浄瑠璃を作るとハ……見玉へ言ッたばかりで雨が降りさうよなッたせ。 夫りやいゝが、君が院本なら僕ハ和歌だ『大和歌ハ人の心を種として万の言の葉とぞなれりける』ぶ、人丸、赤人も見て逃げ出すやうな、躬恆貫之も頭を下げるていのを……おい君『私にばッかり口叩かせ、お前ハ目でも潰れたか』だ。 一生懸命に書いてるな。然らば切掛爲、なんだか浄瑠璃の方ぢい、役廻りたッよな。」

「出來たぞいゝか『祇園精舍の鐘の聲ハ諸行無常……』、いゝか是からだよ『皿掃除の鼻れ色は……』甘からうだらうぜ。」

「ん夫れッ切りか、平家物語りハ恐れるね、僕のなんぞハ人の糟粕と嘗めるんぢやないや。 自から一機軸を出せ丈がえらからう？ いゝか『花の色てうつりにけりないた……』」

「いよ小町姫の新機軸……」

「こいつハ知ッてるな。 だが聞き玉へ一字一句でもちがひやア宜いんだらう。 姨捨山の月あんぞ好例だせ。 跡と聞れ玉へ『いた……いた……いたゞ……』おッとけんのん『頂に』よ、いゝか」

「よくも無い！ 歌にいゝかゝくッて、いろいろ幾つ附くんだて？」

「まア聞き玉へ、いゝか」

「又か？」

「默ッて聞き玉へ。」

「いゝかゐ？」

「あアに斯うよ。『頂に雪霜を置く姥とあるまで』、せうぶ甘からう。」

「燒直し博士！ おッと花の色ぶから染め直しの紺屋さんか。 はゝゝゝ」

（ヘ） 醉 香（トウケイ）

色則是空、空則是色と敎へられ、一天無二の法雨に浴し、塵界を避けし身よも、爛熳と咲揃ふ花の色にハ覺えぬ爪繰る

念珠を落し、靉靆たる霞を出る遠山、滾々として瑠璃を流す此の如き河水には思はず唱名の聲を口よ絶つものの。況して如法暗夜の俗界に住み、滄浪れ濁りを吸ふ者、誰か花に涙雨を灑ぎ、月に愁雲を起すものならんや、さらば春の花に醉ひて、二日れ雨に色褪せ、三日の風に葩を散すと知らそ。籬に咲ける朝顔と眺めては、露の干ぬ間に凋衰する命たる事とも知らそ。秋來れた嬌艶たる菊花に游きて、霜雪の脊後を襲ぬを知らず。雪降る冬には、炬燵に居坐りて、玉子酒よ暖を取り、奪魂の鬼風は殺々たる寒風に勝るを知らそ。あゝうたてしく。實ふ淺ましきは凡夫れ境界よ、といふ吾も往時は綿繡の裝飾となして、冥途の境に益なく、珠玉の寶財を貢りて閻王の宮に利なきを知らざりしが。月にも花にも換へ難き愛子を失ひて、初めて人世の果敢なきを知れり。之を思へバ彼等の煩惱に苦しむと深く怪むよ足らず。あゝ昔散る花よ感して無常を悟りし人ありと聞く、今日此花に戯むるゝ人も亦人界の厭ふ可きを悟らざるにもあらそ。それを思へバ煩惱則菩提、善惡邪正不二一如とは有難き御敎にてそ。

以上二章第二章

阿古屋姫

平山靜子

上

秋の野におく白露と
亂れそめまて過ぎし年、
歌のむしろにはからずも、
ゆかり色こき實方の
藻に住む虫のわれからと
涙の時雨晴れ間なく
神に佛よねぎ事の
人の心も春の頃
結ぶゑにしは光徽殿、
思ひやらきて想人の
嬉しき春も名殘りなく
跡も止先すなりにけり。
契りしゑにし深みとり
くものふるまひ有りし夜の
まだき鳴くなるくたかけの
思へバよくきくたかけや
袖絞らすも汝れなるぞ。

つらぬきとめぬ玉の緒の
玉座まぢかき雲の上
相見し人はむらさきの
君とは聞けど海人の苅る
言ひよる術は長月の
思ひ焦れてくよ／＼と
其甲斐ありて結ぼれし
櫻の宴の折からに
おぼろ月夜の古へも
袂を引くや梓弓
梢の若葉ふま捨てゝ
誓ひし春はくれ行けど、
忍びあふ夜もさゝがよの
情けの言葉思ひねの
聲にうれしれ夢破れ、
はなれともなき後朝よ
今又君を夢に見て、

心慰む甲斐もなく
汝れあさけも知らぬ火の
實に世の中に汝あくバ
心うきことなかるらん、
如何なる人の言ひ初めし。
同し流れの末くみて
今宵來んとの約束に
君きませしと思ひしに
またもや門に音づるゝ、
そをかならぬかまつ宵ゐ
あかぬ別れの鳥よりも
若しや〳〵と夜もすがら
月かげ消えて玉だれの
思ひ亂れし阿古屋姫
椽の柱よもふれつゝ
露もつ樣をながめつゝ
變り易きい世の中の
彼の君のみぞ水くさき
さはさりながらとよかくよ

聲々高と嬉げしゐ
磯邊によそる仇浪よ。
戀する人のかくばかり
戀ぞる身こそつらけれど
今ぞ我身も戀川の
思ひ知ることそはかなかれ。
柴の戸ぼそをたゝきしは
くひなのたゝく音なりた。
今ぞ戀しき君なるか、
ふけ行く鐘の聲きくは
まことのうすき君ぞかし。
待ちし甲斐なく有明の
隙間を洩るゝ朝日かげ。
ねみだれ髮をかきあげて
咲きみだれたる常夏の
若しや浮心變りしか
人の心のつねなきぞ
御心いかで在すべき。
逢てぬへもゐる我思ひ、

切なる心やるせなき
折からゆかき上臈の
あわたゞしげよかけ來り
見ればひとみもうるみつゝ、
ふるへる手とバつかへつゝ
宵に賓方中將の
實に理りあさべるらし。
そも氣づかもし何故ぞ。
否なさる事に侍べらそ。
否なさる事ゐ候らはぞ。
御心しづめ聞し召せ。
今朝しも市よ行きんとて
やかふの童はに行きあひて、
敕勘受けて彼の君ハ……
とは僞りにあらざるや。
げよいたもしや中將ハ
さすらへの御身となられしと
そは誠かや悲しやな
比翼連理ハものかもと

乙女の樣ぞいぢらしき。
青女房と變しきが
いとうれもしき面影よ
姫の姿を見るよりも
のう姫君よ聞こし召せ、
訪ひ玉はぬもことわりぞ、
言ひも果てぬに阿古屋姫
餘所に増す花ある故か。
いたつき故にきまさぬか。
ゆゝしき事にて侍るかし、
お清所のはした女が
御車寄せにて彼の君の
きけバ昨日のま晝頃
なよ敕勘と受け玉ふ
否な姫君よ聞こしめせ。
處もあるに陸の奥に
聞きて妾につげ侍り。
きのふまでもけふまでも
契りしこともなまよみの

實にかひなき我身やと
涙のひまに打見やり、
只一言の御文も、
御ことづてはなかりしか。
彼の君とても姫君を
御ひまなかりし故ならん。
さりとは餘りなさけなや、
何樂しみにながらへん。
思ひ亂るゝ我心
何としてかは送るべき。
其思ふ間ぞなかなかに
とても死ぬべき我命
かゝるつらさもあるまじと
及ばぬ父母に御なげき
此世に於てまれなたり
過世になせる罪とがの
世には幸なき乙女子も
はかなきものゝあるべきに。
つれなきものの命なり、
消え入るばかり歎きしが
如何に敕勘なればとて
殘し玉はぬうらめしさ。
否さる事は侍らねど
忘れ玉ひし故ならで
實にさることもあるべきが
君にわかれて我とても
一日逢はぬもかくばかり
今より長き年月を
思ひなやみて消ゆるとも
身を切るよりもつらからん。
刄の露と消ゆるなら
思へど惠み海山も
かけまゐらすも恐ろしゝ。
おかせし罪でなけれども
執ねくむくふ故なるぞ。
ありとは聞けどかくばかり
實に厭はしき世の中に
はかなきものは命なり。

月前叢話

さくら

其一　鏡の花

「アノどこいらですね墓は」言ッたのは廿四五の脊のスラリとした婦人髮は丸髷に結びて小紋ちりめんの綿入を着黑七々子に下り藤の一所紋ある羽織を被り利休鼠の縮珍の丸帯をしめたり其人品衣服裝飾品を見ても由ある人の夫人とは察せられぬ

「ハイ余程奥でムいます」　答へるは年頃廿一ばかりの忠實相な侍女らしき女なり、

「さぞ御立派でしやうねー、ホントニ人間ッて譯らない者妾が出立する時分新橋まで送ッて來て下すッて、『其れでは御きげんよう、何れ又どこかので御目に掛りませうからねー、此頃の時節は、何日何時どこで御目に掛るか分りませんから。　マア御早く御歸京成さいまし、妾しは其れを今日の悲しさに引きかへて樂しみに御待ち申して居ます』ッて」手巾顏へおし當てゝ聲くもらせ、「御自分でも其なお早く御亡くなり成さらうとは、ねー、……其れが猶更おいぢらしう……」

侍女もたまり兼ねて涙をそゝり上げ、「奥……奥樣も、まあとは其れが……く……くやしいと……おッしやッてヒムいました、其れに、せめて子供の顏が見て……往きたい……」

「ウンウン、さうでしたらうさねー、しかし、御子さんが有ると猶の事、御心が殘りましやうから」、互に顏見られるが恥かしく横を見ながらまぎらす内にハヤ多くの墓のある處へ來りぬ、夫人は彼方此方見合せに、立派なるも有れば、麁末なるもあり、此内には、若き人や住む老人なるや、子供な

るや、其の家人に成りたらばいかに悲しかるべき、吾今、君の夭死を悲むと同時、多くの墓と見る毎胸つぶるゝ思ひ、況てや、半身の吾、いつ此の樣に成るべきや。　と流石に夫人は物の哀れを知りし身の涙に曇りて頭を垂れしまゝ但ある新らしき墓前にまでは來りぬ、

「これが奥樣の」　侍女に言はれて、やうやくお心付き、はれ上りし眼を開き見れば、玉垣いかめしく回らせし内に、仙台石の大きやかなる碑にあはれ、昔しの親しき友どちの稱名は刻まれぬ、今は言葉もなく、只口の裡で互に稱ふる法名悲しげに絶えざる聞ゆる南無阿々々は聲。　昔は此なお名では無ッる者を、此なむくつけの石碑ではなかつた者を、世にも勝れる美形、其の顔ばせに、能く對した御名、麗子！其れぞに今は此の大きな石に、たゞ麗の一字と殘して、要らぬ惡き忌はしき文字のみ、誰が其の樣お成り玉へと頼みしぞお情ないは、天は神、かゝる優しき心ばえの美しき淑女を、ナゼナニ故に彼の世へ連れ玉ひしぞ、チェーッ！　これも因縁り〳〵吾よりは又親御夫の身に取らば如何程に悲しかるべき、偖ては美人薄命との言は麗子さまの御身の上の事ぅ。水くみ來りし、阿伽桶見るにつけても涙のみ先ぶゝき此上もなき御好きな櫻花手向くるもうら悲し、夫人は持ち來まし、香を焚きながらつく〴〵墓面と見てははッ〳〵と涙とこぼし今思へばこゝ二年前、妾が敦賀へ參ります時、新橋まで送ッて下さッて、又は逢ふ日を樂みに待ッとの御言葉今も猶は耳に殘る者と、ア、殘らぬは其の御姿、紙の寫眞よか成るべき、承れば肺でとの事、コッホ氏藥、何故に早く來らざりしぞ重ね〴〵も恨りな妾、君の去り玉ひしと聞くや早く上京して共々棺を御送り申さんと思ひしお折柄懐姙中にて其をも出來ぞ恨みを呑んで此處に半年余やうやく夫の許しを受けて昨日東京參りました、貰い其日にもと思ひましたが早や日も暮を果てた頃其れ故ッィにせん方なく翌日を期して即ち只今御墓參に參じました、ゑい子さま！　麗子さま昔し御一所に手列ねて學校の運動場を歩きながら御互に試驗は問題は答の善し惡しを評し合ひし事も誠に果敢なき夢と成りました、今これ指にはめたゴールドはリング之れは何の爲先とて賜はりしぞ、御忘れは爲さるまじ共に學校卒業の時浮薄の女子は情人に指輪と贈る等いへど妾は其な事は大嫌ひ因ッて幾百里互お隔ッた處に有ッても、舊誼と忘れぬ樣にと送り玉ひし此の指輪、はからぬ、ゐたみと、成りました其時妾が差しあげた品はどう成されました、御瞑目の時も、ともて居せられしぅ。　太き吐息をつきては涙！　益にもならぬくり言かごとがましくも言ひ列ねて長く御耳を汚しました、ア、南無清心院麗室貞大姉、なむあみだぶなむあみだぶ。

＊　◎　＊　◎　＊　◎　＊　◎

「へエ、其れでね……此な事申し上げましては、誠に濟みませんが旦那は隨分浮氣を爲さいましたのでムい升でそげど奥樣は時々御誠を遊ばしてナットモ嫉妬といふ事遊ばさぬのみか、妾しは貴君の御名譽を思ッて申し升の、別に變お心で言ふのでは決してムいません、ッてね。　其れに妾しは奥樣が御嫁でに成りましてから二月程の處へ參りまして其れから始終御傍で使ッて戴いて居ましたので、奥樣の遊ばす事は

一番よく存じて居りますが御婚禮后一年もかゝ經ッてから旦那様がチョコ〳〵と柳橋や今春へ御出でに成る様に成りましたー其れが奥様の御實家へも知れましたと見えまして、其後御兄様が御出でに成りまして、此頃岡ハ浮氣をするッてね、大層の評判ざせ。　と仰しやれ升と奥様ハ御笑ひ遊ばして。イ、エチットモ其な事ハムいませんよ、ホントニ、世間の人ッて、其な事を申して居升か。　と素知らぬ顔で御出で遊ばしましたが其れから御兄様が御歸り成りましてから旦那様が御役所から御歸りお成ッて。　今日ハ誰か御客が有ッたのかと御きゝ遊ばしたら。　ハイ兄が參りまして貴君にもよろしくと申して居りました。　と仰しやイ升と旦那様ハ御自分が浮氣して居らつしやる者ですから傷持ッ足でね。　己の事何か言ッてだッたか。　何となく御問ひ遊ばすと奥様ハ。　イヽエ別に、何も只妾に夫ハ大切にしよと呉れ〳〵も申して歸りました。　其時旦那様ハたゞ苦笑をして居らッしやいましたか、其後は相變らず、何處へか、御出でゞムいました。」

語る侍女も相手の夫人の顔をながめ

「妾は最早や御邸へ上りましてから四五年に成り升が奥様の遊ばす事は、丸でいつも同じで御婚禮の當座の通りでムいましたハして、御承知の堅い御氣質の御方で居らッしやる者ですから御顔の御美しいので隨分變な事を申した者もムいましたが中々に御聞き遊ばさず旦那様の御顔にかゝる事は仕ないと酷くはね付けて…其れ〳〵御若いのに感心な御方で、まことに今更恨らムいます。」

「ホントニ、あたら花を散らして恨しい……其れに御いくつでしたエート、妾より一ッ御上だッたから、スルト廿四でしたかね」

「ハイ、お廿四で、十月……其れに大變御慈悲深い御方で、いつぞやも上野の美術展覽會とかへ御出で遊ばす途中、六十余りの御ぢいさんが盲の女の子を連れて通る人にお錢を呉れろと頼み升を皆つれなくも振り放ッて、後をも見ずに往まきすを奥様が御覽遊ばして氣の毒に思し召し、いくらか御金を御遣り遊しましたが、其な事は度々でムれましふ。」語り乍ゞけんとせしが俄かに口曇り、見る間にハヤボト〳〵……膝の上に落ッる點滴着物に、にじむを手拭にておさへながら、ふるへる口をかみしめ、かみしめ思ひ切ッて大きな聲を出し、

「アノ御休みに、參りましてから廿日目でした、御傍へ御召し遊ばして、『妾ハ此度ハとても……とても、いけないから、跡ハ御前よく、……そして、若し妾が亡くなッたら、御前もよく知ッて居る蒔繪の手文庫あれハ、妾が一番大切にして居たのだから失禮だけれども、内藤の奥様に……』ヒーッ」とばかり泣き伏せバ夫人もたまり兼ねて「アノ、わた……わたしに……マア、まかし、其なに泣かないで」とめ様とハしたもの、親しき朋友の事、共に袖をぞぬらしける、やがて侍女ハ顔を上げ

「ハイ、其な事をね、仰しやれましたのでムい升よ其れから丁度三日目でした、御亡く成り遊ばしたのハ。まかしね、旦那様も其半年ばかり前から大變御謹み深く御成り遊ばして奥様を其れは〳〵大層御親切に御介抱遊ばして」

「マア、そふでしたか……然し、御前さんハ矢張り使ッて戴く心算？」「ヘエ、後の奥様でも御嫁で遊しましふら、不束ながらも、置いて戴かうと存じて居るのですが、只今の處ハ旦那様はどうしても後妻を貰らはぬと仰せでムい升ので、いづれ其内御暇を、戴くつもりで、其れが、女の御方だと宜しうムい升か、まだ御若い男の御方で居らッしやい升から、イエ旦那様に限ッて其な事ハムいまんが然し世間の者ハ隨分とやかう申さないとも言はれませんから」

「其りやマア、さうさね」　言ッて帶の間から、時計を出して見て「チヤッ」いかにも驚いふといふ体、「長話しで大層をそく成ッた事、其れじやア、最う歸るとしやう、鳥渡、

車を」侍女と「ハイ」言ひながらポン／＼と柏手打てば、やがて下女の來るに此事言ひ附ければ畏りて退りぬ、そも／＼此の二人は、たぞ言はずもがな、前に、親友の墓前に來りて、いたく悲みなげきたる内藤夫人と侍女なり、今しも邊りの料理屋に登りて、鬱發を興じ種々なつかしき友が日頃の行ひ、臨終の時の事など聞き居し者とぞ知られぬ

「夫人樣、あなたは、ホントニ御感心で居らッしやい升ね御家からお寺までは一寸小一里御座い升のに御歩き遊ばしてさぞ御くたびれ遊ばしましたでしやう草葉の蔭で奥樣がどんなにか、御喜びの事で御坐い升。」

「でもね、余り失禮ぶからしかし、此處からは御免被ッて……」

嗚呼、きけば聞く程えたさしいは麗子といふ岡某氏の妻君、其れに伴ふ此の夫人、此の人にして此の朋友あり此朋友にして此の人ありと言はんか、何れにもせよ、美はしきは扨も心の花！

◎　◎　◎　◎　◎　◎　◎　◎

其後敦賀ヨリ來りし人の話しに内藤の奥樣は胸莫炎にかゝりて今こと一命も覺束なきよし、彼の蒔繪の手文庫は如何？ ゴールドのリングは、誰か受くべき、叱ッ！　今はかゝる事言ふべき之れ時かは。　葉末に殘る白露の果敢なき身の境隅、心して吹け誘ふ秋風。

（完）

一寸美妙さまの眞似をして、之も太くも此の樣な者を作り定先し、御社中で畫猴覺しの御笑艸と成る事で厶いましやう、この之れは只ホンの日永のいたづら事、等と、おまかして、御目を汚し升段いくゑにも御容赦を。

右本名と故あッてかくす、如何にも

優美な

さくら式部拜

吾が尊敬信愛する

先生へ

詠松島

碧溪閑史

足曳の　山も澤なり
日れ本に　生きし身こそ
千松島　彌生のそらに
打渡り、雄島のさきに
目もあやに　霞たなびく
心地せり。磯邊の松れ
見わたせば　ちさとの波れ
八十島れ　常盤のみどり
たゞよへり。眞砂を洗ふ
松が枝と　はらふ春風
波の花、打かつぎつゝ
百千鳥、海人の小舟の
鴎のと　あやまされつゝ
見えがくれ　あゝろ／＼に
金花山　其名と共に
二子島　呼べば直ちに
しほけふり　海人すむ里を
福ら島　德らがまゝや
和田れそら　海も澤なる
樂しけれ。名に聞えたる
立出でゝ　吐月の橋と
來て見れば　天の羽衣
雲の中　いとゞゆかしき
木の間より　遙に沖を
ねふりつゝ　上に泛べる
よそほひて　彼方此方に
さゝ波や　緑したゝる
いと清し。岩にひらくる
かけア飛び　友呼びかはす
數見えて、波にゆらるゝ
もしほ艸　靑きしま根に
濟やらん。霞かゝれる
いと高し。前にならぶる
いらへなん。むらがり昇る
知らきたり。國つたゝらの
屛風島　蠢くが如き

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

梢より　はつかに見ゆる　塔の穗は　これぞ名におふ
經ヶ島　年ふる松の　翁さび、　所得てこそ
鶴龜も　千代よろづ代と　まひ遊ぶ。　つきせぬ齡
寶來の　島は江島と　ならびたり　北に向へば
五大堂、　並松の間に　ほの見えつ　千貫島や
旭嶋　高くそびえし　宮戸島　寒風澤の
濱なぎに　なびき釣たき　いとまなみ　世渡る業ぞ
とかしけれ。　姫小松島　やさしくて、　惠比壽大黑
布袋島、　かたちにしるき　名なりけり。　誰にゆかしき
化粧島　落るや天の　かりがねの　島につゞきて
たかの島　いにしへ藤の　秀衡の　軍ぞさめし
處とて　名のみ殘りし　あとゝめて　いづれ見わかぬ
有樣は　言葉ぞ足らず　筆にはなは　及びがたしと
計りなり。　いつしか春の　ながき日も　雲の旗手の
覆ひ來て、　なごりをゝしむ　瑞巖の　淨寺にひゞく
入相の　鐘のひゞきに　暮そめて　ねぐら尋ぬる
夕がらす　ともにやどりに　かへりけり。

韻文作法指針（一）

美妙

諸孃の御もとめに從ひ、いよ〳〵本号から韵文作法を簡略にこゝへ出す事と爲りました。國民の友に出したのと同じ所も多少有りますが、又それに洩れた處も有ります。

一、韻格の定義

韻語或は韻句が獨立、或は二以上結合して完全な節奏を成すに至る一定の順序の標準が韵格です。

韻語とは韻文に用ゐる語、韵句とは韵文に用ゐる句のことで、簡略に說明すれば、別に是が韵語、是が韵句とたしかに定まッて居るものも無いのです。只韵文に用ゐるだけこの名を付けるだけ。

語と句との區別は一寸みじかく言ひにくい事です。一つ或は二つ以上の音が結合して一つの完全な意味を出したのが語です。即ちこゝに「カハ」といふ語が有り、これを「カ」の音を「ハ」の音を二つ合して「カハ」といふ一つの完全な意味を成したので、即ち「カハ」は語です。中には一音で一つの意味が完くなッて居る語が有り、即ち「ヒ」とか、「ヤ」とか言ふ類です。句は語から成る物です。即ち句は一つ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

或ハ二つ以上の語が結合して一つの完全な意味を成したもので、「カハ　ナ　ワタル」といふれハ「カハ」、「ナ」、「ワタル」の三語が合して一つの句を成したものです。

これで韵句と韵語とハ性質ハ讀者も既に御了解の事でしやう。そこで此韵句或ハ韵語が獨立、或ハ二個以上結合して一つの節奏を成すその摸型がつまり韵格と言ふ物です。和歌で言へば五七五七七の三十一字がその韵格です、詩に於てハ五五五五の五言、或ハ七七七七の七言抔が韵格です。

二、　韵律の種類

韵律の中にハ左の各種類が有ります。―

(イ)アイアムバス……短長(○●)
(ロ)トロキイ…………長短(●○)
(ハ)アナペスト………短々長(○○●)
(ニ)ダクナル…………長短々(●○○)
(ホ)スポンデノ………長々(●●)
(ヘ)パーリック………短々(○○)
(ト)モーロス…………長々々(●●●)
(チ)トライブラック……短々々(○○○)
(リ)アムフヒブラック……短長短(○●○)

(ヌ)アムフヒマック……長短長(●○●)
(ル)バクナイ…………短長々(○●●)
(ヲ)アンナバクナイ……長々短(●●○)

此韵律を何かと言ふに、是ハ一つの韵格を組み上げる一聯の名です。其短といひ、長といふハ音調についての話しで是が必要なことなのです。

三、　長と短との區別

「見ル」といふ語を取ッてよく考へると、明らかに高低ハ兩音を具へて居ます。即ち「見ル」。「ミ」で聲を揚げ、「ル」で低げる。之を反對にする事ハ出來ません。「虫」といふ語などゝ之と反對で、高音ハ「シ」になり、低音ハ「ム」になります。中には又「ウメ」のやうに二音共に同調を以て更に高低の無いのも有る、こと〴〵各國の語に是非とも備ッて居る性質で、支那では之を平上去入の四聲に分ち、西洋ではこれをアクセンと言ふのです。そこで、前言ッた「長」といふは此高音のことで、「短」といふのは即ち低音。「見ル」はそれ故「長短」です、「ムシ」は「短長」、「ウメ」は「短々」或は「長々」です。

愛の板ばさみ

小林東天紅

其二

極まり良く走る日の脚休まず　積ゝ重なッて最早六年ばかり　東京の某會社の事務所に　時三郎ハ手足を動かしました

話に聞けバ　此男出京して間も無く、其社に入社の後、一生懸命に必死と成つて勵むうち、社長の氣を知り且ハ氣に入られ、三年と經たぬ内少しばかりの給料受くるまでに爲つて、其處を心の極めどころと、儉約に儉約、年の暮にハ多少の仕送り、何程の足しにも成らぬ事ながら必ず怠ず　親も其れで大に喜び　安心をしたさうです。

今でハ月給四十圓の收入　あれば親を養ない、殘りし自分と仕賄して、殆んど最初の目的ハ達し得られた事と喜ばしく、此頃の親からの手紙、愉快の花で持ち切つた樣でした。少くとも人間一度ハ　恐らく取附かるる魔？　神？　吹き回つて其身に及んだ譯か？　時三郎　何時の間にやら、人も知らず、親とて知らず　廣い世界に二人のみ知る　活劇を演じ始めました。

何ぞと云へバ　社長の娘なほ子と親し過ぎた事、別段に目を懸けられた事とて、屢其家に出入の都度一言二言交はしたが始め。何が氣に好いたか、何を望に取つたり　其れ知れねど　矢張り氷の中に魚ハ住む其の通り。次第に度の登つて、今ハ中々想像の及ぶところでハ、無くなりました。

社長と言ふのハ　青山周俊とて舊某藩の士、十年程以前から其社を立てゝ不絶首座と占めた人、妻ハ春子との中に擧げたハ此なほ子で　今節十八の妙齡、しかも華族女學校とかの生徒であつたとやら。

戀の起りと云ふハ今節二月の事、時三郎用事有つて此家を尋ねたところ、周俊ハ生憎留守の折、なほ子に強ひられて室まで通つた不意の僥倖。探ぐつて見るに斯樣です。

前からして知己と成つた事とて、何の氣無く案内の儘なほ子の室に通りました。通つた處で唯二人きりの差し向ひハ兎角もどかしく話しハ大抵時候の挨拶に跡ハ種切れと爲つて無言の行。其れも長くハ續かず、種さがしの爲めに室の四隅を見渡すと、ふや！　此身の寫眞、麗々しい額の中に飾られて、しかも隣りにハ……何れ謂れかなほ子の像。變に感じて振向く顔ハ　同じ振向いたなほ子の顔と、互の目に映つて、一笑み……やさしい樣な、苦い樣な。　とばかりの内何心なく視詰る目ハ顔の燃ゆる光りに打たれてか、まばゆき目潤かすかに濕んで、果てハ堪への關も切れ、また他を向直しました、其の働きハ全く敏き以心傳心。此處別に書き顯はす畏れ言語も無く、よしや有つたとて之を逡ぐ珍らしい事も有りますまい。強いて云へバ戀と云ふもの如何んなものか、も知らぬ間に人の話で聞いたり、新聞の雜報で見たり又物の本で讀んだ其結果が、冥々の中腦に想像と形くつ、

て、一人合点した晩　此有樣を考へると　どうやら　其れかとも氣が付く。氣が付いて　さて對手と厭ふ譯も無く惡む事も無ければ　よしや別に好きこのむ程で無くても、女に戀はれる事は少しは嬉しい、すくなくとも否では無いもの、其處で始めていとしさの頭を擧げ出して　果ては　耻かしさに顏は火、目は濕むまでとなつたのは時三郎の今の身でした。

なほ子は　恐らく前から思つた事、其人が如何いふ素振をするかと見張つて居ると、嬉しや！氣の就いた風、其のしると自分で信ずる先方の笑を手に入れて笑み歸へすトタンは嬉しさ　一杯。此れでした？

貴孃、少しは社のものが伺ひに出ますの？話は種は手近い社の事、先づ兎角の紛ぎらさに斯う問ひました。

いへ滅多に、貴方ばかりは良くお出で下だすつて…………聞き樣次弟な此の返事、時三郎其れと知れど不作法にも出來き兼ねて、

はあ、さうですの、遂々親父さまと御懇意に願ひますもので、度々御邪魔を致します。

何う致しまして、私も別に御懇意に願ひます方が御坐いませんから　貴方でも入來して下たさらないと　淋しくていけません

この話しも此れ切り、時三郎何がな種をと探せど　良いものなく、辛く見出したは　なほ子の　學校を退校したと云ふ其れでした。

はあ、貴孃は　學校を御止めに爲つたさうですねはー、何うも面白く爲いもんですから止めてしまいました。

面白く無いとは？

あの　如何も　否でしてね、實はあの學校も体裁は良いやうなもの　中にはいつて見ると隨分ひどい事もありますけれ。校長が始めで教師たちが爲すまじき事をしまして、ホントに否でそうら…………

其れで御止めに爲りましたか　私はまた横濱の女學校にでも御出でに爲るのかの樣にチヨツト人から聞きましからね。

おや！　何處から？　如何して私が余所へ行く樣な事なんぞ有りましようー、其れに彼地の學校も矢張り教師たちが人を周旋したりするそうですから　無論否でさね。

周旋するつて何ですか、一寸解し兼ねますがねー。

なほ子は輕く笑つて、返す言葉の出し兼ねる風

其れはね　御承知でしよ、周旋するんですよ、人の間に立つて、其れだから　すきもしないのに無理に推し付けられたりするのが否ですからね、私の行つてた學校も其の通り。

しかしさうばかりでも有りますまい？

時三郎は笑つて斯くなかば戯れに言ひました。

何！　事によると其れがね、却てまー喜ぶ方だかも知れません、多人數の中には…………しかし私は否も否も大いやです。

話の進みに挫けハ無く、すらり〳〵と捗取れバ互の遠慮もだん〳〵少なく爲つて、今度ハ寫眞の事でも聞かうか？とまで時三郎も思ひました、一方も亦一方先方で言ひ出さなければ話し出しても見やうか、心ハ雙方是れ、が何と無く耻かしいと言ふも　可笑い事なれど　話しにくゝ　言ひにくゝ　誰今の處ハ其れへと話しを近寄らせ度い兩人の願ひ　返答も一つとして粗略にハ出しませんでした。

教師の見立て位でハ　意に入りませんね？　ハ自分が撰んだ良い人が外に有るんでしやう、位で慥に裏に包んだ言葉。

なほ子ハ敏つた事と見えて

否ですよ、貴方ハ冷かしてさ、そんな事を私ハ申しましたか

い、へ、たゞ私の推察丈けです、甚失禮を申しました、しかし何だかそんな風に聞こえたでハ無い、耳にハいた樣でした。貴方　御心が御心だから　さう聞き取れたのでしよう。

今度ハ貴孃が冷かし、先の復讐ですかまー　どうでも良う御座います。貴孃の御心ハ人にハ知れない譯ですから。

みんなにハ知らなくても　誰か知つてるかも知れませんわね、殊によると。

誰かとハ？　澄まして問ひました。

さう眞面目に御爲りなさらなくても良う御坐いますよ知つてる同志ハ知つてますさねー。

と思ひ構へた事でも少しハ時三郎の驚きを呼びました。

あたりに人無き處に放して置いて　あぶ無いものハ稚ない小供と妙齡の男女二人、今日の二人の話ハ何と云ふ事でしやう。其れが妨げられずに　半年あまりも經つて今となつた譯大方此の話の後ハ互の眼の水晶液に　互の顔が寫され果てた事でしよう。

四時の哀

野邊の若草

いろか　ゆかしき　さくら花
　よひの　あらしに　花　散りて
こずゑは　まれに、地は　しげく、
　きのふの　すがた　今ハ　無し。

いと　かしましく　鳴く　蟬も
　ながらへがたし　夏　されば、
木々の　こずゑに　かゝりける
　からを　かたみと　かげ　隱す。

そゝきの　もとの　きり〳〵す、
　哀を　そふる　玉の　ねも
露　消去りて　霜　おけば、
　この葉と　共に　かれて　行く。

こぶちハ　やせて　骨　ばかり
　花は　ほづえに　みちぬれど
かをり　無ければ　雪にもや
　ながめぞ　さびし　野も　山も。

薔薇の刺

東天紅

對をいのちれ　世の中に
　神と喜び、　魔といへる
人の心ぞ
　哀れなれ。
　垣をいろどる　ばらの花、
をかしき色の　そが中に
　こもるかとりに　人ぞ酔ふ。
露よふるやひ、　みどりなす
　わか葉のうられ　針はしも
おもての笑に　たくらべて
　添ふべきものと　思はへず。

述懷

露箏子

人のうき世に　さくら木の
　花を見あてれ　のぼり坂、
そゝむに難く　路とほし
　猶いくとせり　旅すべき。
うときをくさき　思ひやれバ、
　結ぶよたへぬ　小夜の暮。
さめてぞ窓ハ　朝日照る
　けふも昨日よ　ことならぞ。

通信問答

●藤元あさ――㈠文學とハいふ語の實義ハ古來色々有り、或ハ歷史法律など所謂無形的學術をも文學の內に入れた人も有りましたが、畢竟是ハ潤不穩者です。今簡略で且頗る適當を得て居るれハ三上氏の日本文學史にある所の實義即ち「文學とハある文体を以て功みに人の思想、感情、想像を表はしたる者にして、實用と快樂とを兼ぬるを目的とし、大多數れ人に大体の智識を傳ふる者をいふ」との、是です㈡主觀的とハ自已が主になる事、客觀的とハ外物が主となる事、まづ平易に說けバ右の通りです㈢古へハ大体の婦人何れも外出の節ハ被衣と着けました㈣陀羅尼經などハ大聖威怒不動妙王の功力を述べた佛書で文章も中々面白く、初學にハ大体れ意味がわかり易い方の書です㈤歷世女粧考ハどこの書肆にでも有ります㈥蝸牛をつぶし、其汁を石面へ塗り、毎日怠らず水を掛けて居るとよく苔が生るといふ事です。別法、茹でる馬鈴薯をよく磨りどろ〳〵にし、土と等分に交せ、苔を取て之に植ゑると美事に成育する趣です。

●枯藻――㈠梅花子の韵文ハ一種の調、吾々の所見では完全な四調を備へたものと言へません㈡色々の紹介ハ近頃當社で爲ません。

●伊東曉子――ハンドコロンハ代金領收の上ハ弊社で御取次いたし升。

●敬々女史――弊社への郵便御投書ハ帶對なら卅匁まで二錢で宜しいです。

●朧月子――㈠皮の毛の拔けるのハ蒸氣濕氣と受けさせぬやうすれバ防げます㈡すべて獨身の婦人ハミスです㈢色附の机よついた石油のシミを去る法ハ知りません㈣西洋の文學雜誌にハ小話の面白いのが隨分有ります㈤手の色の赤黑いのハ一つハ養生次弟で治ります　甘、酸、脂、何れも過ぎた味の濃厚なものを避けるが第一の心得です。

外出の節顔手足よ塗れバ日ふやけぬ事妙なり梅の雪ハ殿方よても至極工合よろし

府内ハ端書ふて御申越下さをバ即日届けますよ

神田南神保町
四番地本舗
おきなや

府下取次
下谷池端守田○京橋出雲町福原○京橋銀座一丁目佐々木○京橋上槇町安川○牛込築土尾澤○麴町四丁目小西○四谷御門外吹屋○本郷眞砂町尾澤蒼生堂○芝西久保町博仁舍○牛込神樂坂上尾澤○神田小川町笠井○京橋佐柄木町上田○兩國吉川町古矢○下谷西黑門町理生堂○麴町三番町雨宮○神田小柳町明治堂○全淡路町風雲堂○全町眞壁○赤坂田町一丁目增田商店

地方取次
大坂南久太郎町旭屋商店○大坂淡路町日野商會○遠州濱松連尺木村○兵庫港町庚屋中川商店○岩代若松七日町一木鈴本商店○備中倉敷林源十郎

音樂雜誌

毎月一回發兌、壹冊六錢、六冊前金三十五錢、十二冊同六十九錢、全國中郵稅を受けそ郵劵代用ハ總て一割增の事

音樂雜誌は吾邦音樂上の趣味を高尙ならし又正を賛け邪を矯して敎育と風化とに其稗益を與へんか爲め（音樂）欄よハ社說及ひ大家の卓論、講義、沿革、歷史、樂理、敎授法、（歌曲）欄よこ名家の歌章新曲の樂譜、（寄書）樂の類派を問はす（參考）欄よハ古今の俚歌、俗踊、と其圖畫、曲譜を入れ（雜錄）欄にハ近古音樂家の歷傳肖像、諸樂の傳來記、樂器の發明解釋等（小說）欄にハ最も面白き繪入の美談（問答）欄にハ相互の質問解答（間覽）よハ古今珍奇の樂書樂器等の圖解（雜纂）にと內外細大音樂實況等を掲載せるを以て敎育に風化に其志を懷かるゝ處の貴紳と言ふまてもなく大小公私の各學校諸君等より陸續と愛讀の榮と辱ふし本誌の光榮かたりなく特に今回屈指の有名なる四十餘名の諸君よハ其寄書を諾せられ一層本誌ふ燦然たる光輝を發したれハ請ふ江湖の君子試に一讀わらん事を

發行所　東京麴町區有樂町壹丁目五番地　音樂雜誌社

○佛帝拿波翁曰く音樂ハ人情上よ至大の感化を與し人心上に非常の勢力を及はそ者也故よ政府ハ音樂の一學術に就てハ他の諸學術に於るよりも一層奬勵すると勉むへし名家の作に係る道德上ハ歌曲ハ深く人心と感動せしむる事道德を論そる書ハ唯智力ふ訴ふるものゝ比よ非さる也

○シエークスピーヤ、曰く人として音樂の心なく優美の音を聞て之に感せさる者は其人必す信義なく其性詐僞を爲し易しと

○ルーテル曰く音樂を知さる者ハ敎育者に適せそと

○ヘルデル曰く曲を合せて唱歌する時と其和する事兄弟の如し心是に由て開かれ精靈と心と自ら歌唱抑揚の間ふ存在するを感すと

○エフレム氏曰く謳僞なる唱歌は能く石の如き心を溶解して淚滴と爲すを得へし

○ツエケール氏曰く遊戱と唱歌ハ童兒の由て成長し得る所なり故に快爽ある唱歌は常に活潑なる兒童の良友あり

○スペンサー氏曰く音樂は人間の情緒なり

○プリブリッチ氏曰く唱歌ハ永遠忘るへからさるの語を敎ふべし

「活波瀾」は宗教海の燈臺なり
「活波瀾」は政治界の羅針なり
「活波瀾」は全社會の耳目なり
「活波瀾」は我國民の良友なり
愛讀すべきハ實ニ活波瀾なり
但し代價ハ一部郵税とも金五錢五厘にして發行ハ毎月廿五日なり
發行所　東京市白金臺町二丁目六十九番地　活波瀾社

早くわらんべを讀むべし
問「近頃ハ生徒用の雜誌も一雨毎ニ殖ゐるとハ殖ゐるやうでのすが其の基礎如何にも手堅くそして廢刊などの心配のないものハ果してどの雜誌ですか答「先づどの雜誌よりも基礎が手堅くて至極安固なるものハ外でもありません同胞社の
わらんべ
毎月一日發行　定價壹錢　郵税五厘
雖にても一たびわらんべと見られた人ハご承知ある通り其の誌中にハ　わらんべ。小說。雜纂。談叢。問答。餘興。文藝。廣告。(毎号圖書を挿む)等の八欄と置いて生徒諸子の心得となる事柄と普く網羅し文章ハ面白く且つやさしく何人ニても讀めるやうニ物したれバ此種れ雜誌中でハ極上等無類飛切です故に一号でも早く讀まねバ其れ丈けの損あり增して二号三号も後れて氣付くとも已ニ晚し〳〵
發行所　岡山縣岡山市大字上ノ町六十一番地　同胞社
賣捌元　全縣全市全町全番地　細謹舍

婦人下宿
婦人
下宿
婦人下宿ハ左の契約と結んで營業を致します
方に有るまじき事をなさるゝ御方と
夜分の外出と多くなさるゝ御方の御
ハ御断り致します○非常の時ハ外男
子を室内へ御招きの義も右同樣御断
婦人下宿ハ本郷區弓町二丁目三番地大川つわ

花織錦賣捌廣告
橫濱製產新發明花織錦の儀實業家川崎花子氏多年の困苦と巫驗と以て舊來の紙布ニ一層改良を加へ實に完全完美の好結果を得たる未曾有の新織にして曾て各新聞紙上に非常なる賞賛を得て面目を博し花子氏躬自ら工女を指揮し舊ニ倍し工場恰も梅林に鶯先導して諸鳥囀るか如く其盛なる事尋常織殿の比ニ非す今回特約を結ひ支店を設置泥く都府に於て販賣せんとす希紳士令孃樞要の逸品なれハ價直の低廉と物品の佳良とを御一覽の上陸續御購求有ん事を願上候
品目
一單物地　一女帶地
一夜具地　一座蒲團地
一窓掛地　一テーフル掛地
其他御注文に應し調製仕候
日本橋區蠣殼町二丁目七番地
氏家なか

●美妙齋主人新作
○やたらじま…………價郵税共十七錢
○猿面冠者…………同上十錢
○數師三昧…………同上十錢
以上既發小說　書肆　春陽堂
○韵文　夢の天女
○雜篇　雨の日ぐらし
以上近刊、天女ハ春陽堂日ぐらしハ博文館から。
○大詆辱
右都の花發兌中の小說
○韻文、山の翁
右國民の友發兌中

以良都女　第五巻　明治二四年

発行者　船橋　治
発行所　不二出版株式会社
東京都文京区本郷三丁目一六番六号
電話〇三(八一二)四四三三
振替　東京六―九四〇八四
印刷所　(有)　東光
製本所　青木製本所
一九八三年一月二五日／復刻版発行

©1983

乱丁落丁はお取り替えいたします

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

CORNELL UNIVERSITY LIBRARY
3 1924 113 041 929

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

CORNELL UNIVERSITY LIBRARY
3 1924 113 041 929

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

WASON
HQ
1762
I75+
no.76-84
1891

ASIA

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY